

.....

天狗の弟子になった左治兵衛

.....



むかしむかし、和泉の村に左治兵衛というお年寄りが住んでおったそうな。

左治兵衛さんは、たいそう働き者じゃった。ある日のこと、薪が少のうなだったので、湯山村のほうに出かけることにした。

「ほいじゃあ、ちょっと湯山のとこまで薪を拾うてこうわい。」

近所の人に声をかけると、湯山村に向かって歩いていった。しかし、その日は帰ってこなかったの、和泉村の人たちは、

「左治兵衛さんはどうしたんかのう。湯山は遠いから、明日帰ることにしたんかのう。」

などと言って心配をしておった。しかし、それから何日たっても帰ってこなかった。1年たっても帰ってこなかったの、和泉村の人たちは、左治兵衛さんはきっと死んでしまったに違いないと思い、一周忌の法要をすることにした。すると、そのときじゃ。左治兵衛さんがひょっこり帰ってきた。そして、左治兵衛さんは、今までのことを話してくれた。

「わしが山で薪を拾いよったら、天狗さんが現れてのう、『弟子にならんか』と言うんじゃ。わしも残り少ない人生じゃから、思い切って天狗さんの弟子になることにしたんじゃ。」

「天狗の弟子になって修行をしたんかのう？」

「おおそうじゃとも。しかし、歳じゃから簡単には上達はせんよ。でも、火事をおさめる神通力はなんとか身に付いたぞ。わしはこれから山に帰って修行を続けるが、もし、和泉村で火事が起こったら、大きくならんようにしてやれるぞ。」

「おお、それはありがたい。どうすればええんかのう。」

「もし火事が起こったら、『左治兵衛一党』と叫ぶんじゃ。そうすれば、火事はだんだん小さくなるけんの。」

そう言って左治兵衛さんは山に帰って行った。

「左治兵衛一党」というのは、「左治兵衛の仲間」という意味じゃな。

それからしばらくして、和泉村に火事が起こった。村人は左治兵衛さんが言ったことを思い出し、数人が隣の家の屋根に上がった。そして、笹を左右に振りながら「左治兵衛一党」と叫んだ。するとどうしたことじゃ。風もやみ、火も下火になって、隣の家に燃え移る前に消えてしもうたんじゃと。

左治兵衛さんが、神通力で火を消してくれたのかもしれないな。

.....

「和泉郷土誌」(昭和62年 和泉郷土誌編集委員会)に記述してある話を、読み聞かせのために脚色しました。